宮崎国際大学教育学部紀要『教育科学論集』第 4 号（2017）16－26 頁

自他の生命を尊重する思いやりのある子どもを育てる学級経営についての一考察

―「自分のよさを生かし、伸ばす」指導を通して―

釋迦堂　幾則＊

【要約】

公示された学習指導要領(2017)の前文に、これからの学校に求められることとして「一人一人の児童が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働」することが示された。これを踏まえ、「自分のよさを生かし、伸ばす」指導という視点から、日々の教育活動における指導・支援、評価の工夫を通した「自他の生命を尊重する思いやりのある子どもを育てる学級経営」の取組を取り上げ、再考察を加えた。子どもは本来、様々なよさや可能性を内に秘め、よりよく生きたい、より向上したいという望ましい欲求をもった存在である。この「よさと可能性」に着目した児童理解は、子どものありのままの姿とその生き方が見えてくる。これが一人一人に対する指導・支援の具体的な方法につながると考える。

【キーワード】　よさ、可能性、生命尊重、思いやり、学級経営

１　はじめに

現代は、価値の多様化の時代と言われる。しかしいろいろな価値観を認めながらも、児童生徒がこれからの社会の変化に対応して主体的に生きるために、人間として身に付けておくべき普遍的な価値観があるはずである。それはものが豊かになって忘れかけている生命尊重の精神に基づく生き方・在り方であると考える。これは、生きていること（自他の生命）の尊重であり、よりよく生きようとする生き方そのもの（見方、考え方、行動の仕方、感じ方）をかけがえのないものとして尊重し、人として生きていくことに喜びを見いだし、力強く生き、誰とでも協力できる思いやりのある子どもを育成することであると考える。元来人間は、他の人々との関わりの中において存在しているものであるから、こうした人間性の根幹とも言える力の育成は、生命を尊重する心や他の人を思いやる心、あるいは豊かな心を育成する内容を学級経営の柱におき、人間的な交わりの機会を設定する中で自分と集団、自分と他人との関わりについてじっくり考える活動を通した心の教育を様々な形で意図的・計画的に、しかも実践的に行われるべきものであると考える。

このような考えのもとに、「自他の生命を尊重する思いやりのある子どもを育てる学級経営」の研究主題のもと、「聞くこと」・「貢献すること」・「相互に信頼し敬愛し合う人間関係づくり」・「関連指導を重視した生命尊重」・「自分のよさを生かし、伸ばす」・「思いやりのある子どもを育てる」など指導の「視点」を変えながら、過年継続研究に取り組んだ。一連の研究の中から、公示された学習指導要領の前文で示された一人一人の児童が自分のよさや可能性を認識できる自己肯定感を育む教育と関連する「自分のよさを生かし伸ばす」指導に関する研究実践の一部を再整理し、考察を加えたい。

《研究内容》
◎　自分や友達のよさに目を向けさせ、積極的にそれらを取り上げ、伸ばすための指導・支援、評価の在り方を工夫する。
①　自分や友達のよさに目を向けさせる指導・支援の工夫
②　よさを取り上げ、伸ばす指導・支援と評価の工夫
③　係の活動における子どものよさを生かす評価の工夫

２　研究の実際

⑴　「よさ」についての基本的な考え方

今日の教育においては、子ども一人一人がその個性を発揮しながら、豊かな自己実現を図ることが求められている。そこでは、子どもの立場に立ち一人一人の人間的成長を主眼とした教育が必要とされている。このため子どもが自分自身をどのようなものとして捉え、どのように方向づけ、励まし統制していくかが重要となってくる。

子ども（６年生、３５名）の実態を見ると、自分の短所に目を向け、自信を失うような否定的な思い込みをしている子どもが多い。このような子どもたちに自分のよさや友達のよさを気付かせることは、自分に対する見方を肯定的なものにしたり、欠点を克服したりする態度につながると考えられる。これが自分のよさを生かし、伸ばすための意欲につながる。このよさを伸ばす指導は、各教科等の指導だけで充実できるものではない。学級経営の中で、保護者との緊密な連携のもと、一人一人の実態に応じた具体的な手立てをとりながら、全教育活動を通して系統的・発展的に行わなければならない。

そこで、学級経営の中で自分や友達のよさに目を向けさせ、積極的にそれらを取り上げ、伸ばすための指導・支援、評価の在り方を工夫することが、望ましい自己認識や自己概念の基礎を培うことにつながり、そのことが自他の生命を尊重する思いやりのある子どもの育成につながると考える。

《研究で目指す子ども像》
○　自分のよさを知り、それを生かしてのびのびと活動できる子ども
○　友達のよさが分かり、自分のよさを伸ばす努力ができる子ども
◇　子どものよさを生かし、伸ばす指導とは、自分らしい生き方をつくりあげていくようにすることを支援する営みであると考えられる。この支援する営みのためには、「子どもは、よりよく生きたい、向上したいという望ましい欲求をもった存在である」という児童観に立つことが必要であると考えられる。
◇　また、子どものよさを積極的に取り上げて伸ばすように、表１のように「教師の目を変革」することが、指導・支援の出発点であると思われる。

表１　子どもをまるごと「よさ」として

○　子どもをまるごと「よさ」として 「子どものよさをとらえ⇒指導・支援に生かす」（長所伸長型の評価観）
○　違いを大切に　⇒　「支え学び合う学習活動の展開」の必要性
○　みんなもっている固有のよさ 一人一人に固有のよさがある　⇒　「よさに気付く教師の確かな目」
○　可能性への信頼
○　個々人の成長・発達に即して可能性を支援

⑵　「よさを生かし、伸ばす」指導の実際

ア　自分や友達のよさに目を向けさせる指導・支援の工夫

子どもに自分のよさを気付かせ、活動意欲をおこさせ、その子の能力を最大限に伸ばす学級経営を進めるには、まず自分や友達のよさに目を向けさせる指導・支援を充実させなければならないと考える。それは、自分自身で、あるいは人に認められて自分の「よさ」を認識することが、その人にとって自分で自分を高め、力を発揮する真のエネルギーになると考えるからである。そこで、表２のように「自分を見つめる場」「自己表現の場」「友達のよさを認める場」を設定し、表２のAの「開放した領域」を広げることにした。

表２　広げよう、開放された「よさ」の窓

	自分が知って（気付いて）いる	自分が知らない（気付かない）	
人に知られている	A　開放した領域（広げる） 自分を見つめる場の設定 （見つめる視点の設定） （振り返りの習慣化） ・　自分を再発見 ・　自己理解と他者理解の深まり （互いの学び合い）	《自分のことを人から教えてもらう、フィードバック》 友達のよさを認める場の設定 ・　自分の捉え直し ・　フィードバックの工夫	B　気付かない領域 （減らす）
人に知られていない	《自分のことを人に伝える場》 自己表現や体験の場の設定 （自己認識の深化） ・　肯定的応答（信頼し、受容し、引き出す）と聞くことの指導 「相手は何を言おうとしているか」		
	C　隠した領域（減らす）		D　未知の領域 隠れた才能の意識化

（ア）常時指導「今日のヒーロー・ヒロイン」の改善

これは、その日の主人公（出席番号順、男女各１名）を決め、自分のことを発表する場を設定するとともに、全員がその子に積極的な関心を寄せ、その子のよさや独自性を認めようとする活動を通して互いの個性を尊重し合い高め合おうとするものである。過年、改善を加えながら実践してきた。子どもは、皆から関心をもたれ、自分のことを知ってもらうのをとても喜び、教師のちょっとした一言で一喜一憂する。それは、自分が大事にしてもらっていることが、大きな喜びであるからであろう。しかし、事前の自己評価や保護者との連携という視点で改善の余地が残った。

そこで３つの場（「自分を見つめる場」「友達のよさを認める場」「自己表現や体験の場」）の設定の工夫（表２）、保護者との連携の充実という視点から、表３の方法で実践することにした。

表３　常時指導「今日のヒーロー・ヒロイン」指導・支援の流れ

時	主な活動	指導・支援上の留意点
事前	・　ふり返りの視点や目標に照らして 「自己評価」 ・　発表に向けての準備（前日）	※　日頃の観察記録や自己評価カード、保護者との連絡プリント「伸ばそう、子どものよいところ」をもとに、本人のよさ（努力、進歩の状況、発展の契機等）についてまとめ、指導の手立てを講ずる。「頑張っている点」「本人に気付かせたいよさ」「皆に紹介し、広めたいよさ」等 ・　自己表現（朝の会）の準備をさせる。「テーマに沿った言葉や絵」「皆に知らせたいこと」「頑張っていること」をカードに書く。 テーマは、「好きなこと」「得意なこと」など、全員が同じテーマで一巡する。より幅広い理解を目指す。
朝の会	・　ヒーロー・ヒロインの紹介 ・　カードをもとにした発表 「自己表現」 ・　みんなからの質問 ・　担任からの激励	・　日直が、ヒーロー・ヒロインのよさを交えて紹介する。（出席番号順、男女各１名） ・　「〇〇さんが自慢するように、確かに一輪車が上手だね」などと、事実に即して称賛すると共に、発表内容をもとにして、後で本人と話し合う。 ・　オープンに質問させ、温かい関心と幅広い理解を目指す。 「友達のよさの発見」「友達のよさの取り入れ」 ・　言葉や拍手などで激励する。絵カードにもコメントを加え、今日のヒーロー・ヒロインコーナーに貼る。
休み時間	・　担任との会話 ・　個別指導	・　できるだけそばにいて何気ない会話を交わし、信頼関係を深めると共に、「先生から大事にされ、認められている」という心理的安定感をもたせる。 ・　よさを伸ばす教育相談「新たな目標の設定」を行う。
帰りの会	・　担任からのコメント 「よさの積極的な取り上げ」	・　本人が、「自分では気づかなかったり意識しなかったりするよさや頑張っていること」等を話し、自分自身やお互いの理解が一層深まるように配慮する。 そのとき、その場で、その子にしか言えないような具体的な内容を取り上げる。
事後	・　保護者との連携	・　努力や高まり、これからの課題、共通指導・支援の内容について連携を図る。（個人カード、電話、家庭訪問等）

〈実践してきた発表テーマ〉

最上級生になって（抱負）→私の名前、小さい頃のエピソード→２０年後の私→私は〇〇名人（己に勝つ）→私の好きなこと→こんな友達が欲しい→今年１年伸びたこと→自由題（１月現在）

〈事前〉

事前に、児童の努力や高まり、課題を改めて考えることになり、個に応じた指導に結びついた。

〈朝の会「自己発表＝自己表現→自己認識」〉

児童は皆から温かい関心を寄せてもらい、自分のことを聞いてもらえるのがとても嬉しいようである。それは、自分がまるごと大事にしてもらっていると感じるからにほかならない。

〈休み時間、放課後「教師による自己認識」〉

何気ない会話や個別指導を通して温かいふれ合いの場を設定することができ、そのことが信頼関係づくりや心理的安定感の獲得につながっている。

〈帰りの会「教師による自己認識」〉

一人一人の独自性に気付かせるとともに、今後の努力と向上に向けての意欲付けの場にもなった。児童は、ちょっとした教師の言葉に一喜一憂する。教師のコメントに対する児童の集中は実に真剣で、食い入るように聞き入っているといった感じである。児童を見る目の大切さや一言の重み、責任の重大さについて痛感させられた。

〈事後「父母との連携による自己認識」〉

児童の高まりをもとに保護者とのコミュニケーションを図り、今後の指導の見通しをもつことができた。

イ　よさを取り上げ、伸ばす指導・支援と評価の工夫

従来の児童理解は、「～できない」といった短所を取り上げがちであったが、子どもを主体とした指導では、「～できる」といった「よさと可能性」に着目した評価観（子どもの姿とその生き方が見え、これが子ども一人一人に対する支援の具体的な方法につながる。）を児童理解の原点にする必要がある。そのため、一人一人の子どもがもっているよさに着目し、それらをさらに伸長させるための学級経営に努めることが大切であると考える。そこで、「よさを見る目への変革」（表１）、「指導と評価の一体化」、「記録の蓄積」の３点に留意し、よさを伸ばす指導・支援と評価を改善することにした。

(ア)　自己の成長を見つめる評価の工夫（評価の視点、方法）

自己評価は、「教師が子どもの内面を知り、適切な指導・支援を行うために実施する」と同時に、「子どもが自分の内面を確かめながら自分自身をつくって欲しいと願って行うもの」である。従って、評価の視点は、「子どもにこのような振り返りの眼を備えて欲しい」という教師の願いが具体化されたものが望ましい。そこで、「努力による向上や進歩を自分で確かめることができる」と共に、「子どもも教師も保護者も活用できる」次のような項目「向上や進歩を捉える主な視点」を立てて、評価の方法を工夫することにした。（表４）

表４　向上や進歩をとらえる主な視点及び教室前面掲示資料

向上・成長・・・できるようになった。上手になった。分かるようになった。

授業や活動への参加・・・頑張った。工夫した。面白かった。満足した。

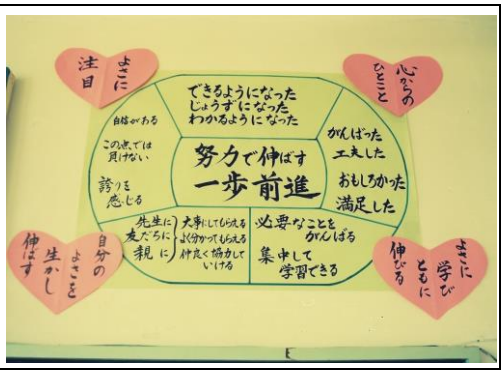
学習についての習慣・態度・・・必要なことを頑張れる。集中して学習できる。

対人関係・・・(友達に・先生に・親に)

大事にしてもらえる。よく分かってもらえる。仲良く協力していける。

自分自身の全体的な在り方・・・自信がある。この点では負けない。誇りを感じる。

＊５つの視点を楕円の図に整理し、カードや教室前面掲示資料として活用



これまでにも自己評価活動を実施し、よさを認めはしたが、その場限りの指導に留まり、「そのよさをさらにどのように伸ばすか」という面での、具体的な見通しをもった学級経営が十分でなかった。しかも「友達のよさに学ぶ」という視点の設定が十分ではなかった。

そこで、表５のような自己評価カードを作成し、自分自身についての見方を積極的、肯定的なものに改善していく契機を与えるような的確なフィードバックの仕方を工夫することにした。さらに、「友達のよさを認める場」を設定したり、評価を蓄積するなどして、よさを生かし、伸ばす学級経営を充実させることにした。

表５　自己評価カード「伸ばそう、わたしのよいところ」

帰りの会及び土曜日に振り返りの場を設定する。（１週間に１枚）

（カードの表面）　「自分史ノート」

- めあて、明日への振り返り
- 自分のよさ、人から指摘された自分のよさ、心に残る優しいことば、やる気になったことば
- 友達から学んだこと、友達のよさ、一緒に活動してよかったこと
- 先生から・・・励ましだけでなく、「何をどのように頑張ればよいか」を明らかにし、できたという事実をフィードバックしてやる。

（カードの裏面）　「こんなに伸びたよ」

- 向上や進歩を捉える５つの視点に沿って高まりを記述する。（５つの視点の円の周りにどんどん書き加える。）学期末には、大きな画用紙に１学期分の高まりをまとめて記入し、お互いの成長ぶりの「認め合いの場」とする。）

◎　カードは、「私のノート」に綴っていき、変容の過程を捉えるようにした。３週間に１回程度回ってくる「今日のヒーロー・ヒロイン」の指導にも生かす。学期の終わりには、学級の高まりについても向上や進歩を捉える５つの視点から評価する。

向上や進歩を捉える主な視点を設定し、自己の成長を見つめる評価を工夫することにより、よさに気付いていなかった児童や否定的な思い込みをしがちな児童が、自分や友達、そして学級集団のよさに注目し、学び合いながら努力による向上や進歩を実感できるようになった。
〈「自分なりの納得」（満足感、自信）や、「今日一日、どんないいことがあるか楽しみだ」（期待感、可能性への信頼）、「みんな一つは特技や自信をもっている」（学級の誇り）〉

(イ)　向上や進歩を捉える個人カードの工夫

よさを生かし、伸ばす指導では保護者との共通理解に基づく指導・支援、評価の積み重ね（児童理解における情報交換、学校・家庭での共通指導、高まりの評価と今後の課題の設定）が不可欠である。子どもの成長をお互いに実感できることは、教師にとっても保護者にとっても何よりの自信と信頼感につながると考える。そこで、表６（学級経営案や道徳教育の学級における指導計画への位置付け、学級懇談会での資料や学級通信等でも活用）のように、教師と保護者が共に活用できる「個人カード」を作成し、子どものよさを伸ばす学級経営の充実を図ることにした。

≪保護者への協力の依頼と協力体制の確立≫

一連の取組についての概要を知らせ（家庭訪問、学級懇談会、学級通信等）、理解と協力を求めると共に、保護者の児童に対する意識調査（子どものよさ、持ち味、高まり、願い、メッセージ、よさを伸ばす方法として心掛けていること）を実施した。保護者からは、熱い願いと愛情の込め

られた回答が数多く寄せられた。

当初、よさにスポットを当てることに戸惑いを感じ、「短所を書く所はないのですか。」「悪い所ならいくらでも書けるのですが。」といった声も聞かれたが、一方でわが子を改めて見直す機会を与えてもらったことに対する感謝の声も寄せられた。

学級懇談会の度に「よさ」に着目し、それを生かし、伸ばす事例をもとに協議を重ねてきたことが、保護者の目の変革や意識改革につながった。

表６　個人カード「伸ばそう、子どものよいところ」(学級懇談会・学級通信で説明)

①　向上や進歩を捉える５つの視点（表４）

②　こんな目でも・・・
- よさ（例えば、やさしい等）
- 変わったこと（変容、高まり）
- 意欲的、積極的に活動している姿（・・・に夢中）
- 誇り
- 努力の姿（・・・を頑張っている等）

③　『保護者と教師のコミュニケーションの広場（必要に応じて活用)』(例　男子）Ｐ：保護者、Ｔ：教師

Ｐ・・・　毎朝、近所の一年生と一緒に登校しています。下級生のお世話を積極的にやっているようです。
Ｔ・・・　すごいですね。学校でも助け合い清掃をはじめ色々な面でリーダーシップを発揮しながら人に積極的に関わっています。
Ｐ・・・　そろばんを一生懸命頑張っています。先日、段位の検定試験があったのですが、見事に初段に合格できました。５点足りない８５点だったので、二段にはなれませんでしたが、次回も頑張って受けると言っております。
　何事にも目標をもってコツコツ努力している姿は、素晴らしいと思います。
Ｔ・・・　段位がとれる。たいしたものだと思います。何事にも真正面からがむしゃらに挑戦する○君。これからが、とても楽しみです。
Ｐ・・・　９月の終わり頃からわが家に一匹ののら猫が住み着くようになり、兄弟三人でかわいがっているようです。動物の世話をすることで、命の大切さや、やさしい思いやりの心が育ってくれればいいと思っています。
Ｔ・・・　今でもとてもやさしい○君のことですが、のら猫君との関わりの中で、また一つ成長できるのかもしれません。
　けんかをしても、仲直りできる優しい心と強い心をもった○君です。最近、日直の仕事で友達から「ありがとう」と言われ、その一言が「もっと頑張りたいです」(「自分歴史ノート」）という意欲と自信につながっています。

《活用のポイント》
○　子どもを見る目の変革に努める。(長所伸長型)

○　保護者と教師が子どものよさを共有し、共通指導・支援に生かす。(「今日のヒーロー・ヒロイン」等)

○　記録の累積を重視し、子どもの変容を理解する。(長期展望)

○　指導要録や通知表に生かし、指導の充実を目指す。

(ウ)　係の活動における子どものよさを生かす評価の工夫

一人一人が友達と協力して取り組む活動の状況について、よさや可能性などを積極的に見いだし、それを子ども一人一人の活動の支援に生かす（自己評価と相互評価と教師による評価が有機的に作用）ことを基本にして評価を進めることにした。そこで、よさにスポットを当て、パフォーマンス

の評価を重視しながら指導と評価の一体化に努めることにした。

【外的要因「承認・賞賛」、内的要因「充実感・達成感・満足感」】

① 個人のこれまでの振り返りと明日への心構えの工夫（月に一回、土曜日）

自己評価カード（季節感のある絵カード）を作成し、「評価を蓄積する。（綴り、自分自身の変容の過程を捉える）」などして、よさを生かし、伸ばす係の活動を充実させることにした。（表７）

表７　自己評価のポイント

○　ただ「工夫した」でなく、「どのように工夫したかといったパフォーマンスの評価」 （課題への取組の姿、結果でなく状況そのものの評価） ○　集団活動を通してのよさや友達のよさへの気付き 「自分だけではできなかったが、力を合わせたからできた。」 ○　「ともに活動する楽しさ」「自主性」「協力」「工夫」等の項目について３段階評価（◎が全部ついたからよいのではない。評価の蓄積により「どういうふうに変容していくか」そのプロセスを見る。） ○　自分の課題の明確化。今後の活動のイメージづくり、願い「今度はこんなことを」「そのために自分は･･･」 ○　自分で見つけた自分のよさ、人から指摘された自分のよさ（係での振り返りの後に記入） ○　教師評価「励ましだけでなく、何をどのように頑張ればよいかを明らかにし、できたという事実をフィードバック。自分では気付かなかったよさに気付かせるフィードバック。」

② 係ごとのこれまでの振り返りと明日への心構えの工夫（月に１回、土曜日）

自己評価カードでの振り返りを踏まえて、集団としての頑張りやお互いのよさに気付く相互評価の場になるような振り返りカードを作成した。基本的には自己評価カードと同じ視点で構成し、それに「ほかの係の頑張り」を加えた。（表８）

表８　係ごとの評価のポイント

○　自己評価を踏まえ、よさの見つけ合いという観点での評価活動になっているか。「こんな助け合いができた（協力）」といった具合に、項目ごとに具体的に評価し、よさをいっぱい認め合う。 ○　集団の中で、一人一人が生かされたか。「ぼくは、よく工夫したという点で共に活動した仲間から頑張りが認められた。」→次の活動への意欲（伸び）につながる。 ○　自分達の頑張りがみんなに喜んでもらえたか、役に立てたかなかなか分かりにくい。そこで、「他の係の頑張り」の項目を設け、教師のコメントに生かすと共に、カードを掲示することにより、全員にも広める。

自己評価や相互評価、教師による評価を関連づけることにより、子どもたちは、お互いのよさに学びながら自分の課題をさらに明確にし、活動意欲（関心・意欲・態度）を高め、よさを発揮するようになった。

また、評価を累積したことにより、子ども自身が「自分や係、友達、学級集団の変容（よさや高まり）を捉えて活動に取り組むことが、活動をより主体的なものにし、自ら考えたり、判断したりして学級生活を向上させる（課題解決に実践的に努める）ことにつながったと考える。

さらに、その過程で「一緒に活動したからできた」「また一緒にやってみたい」といったよさに学び合いながら友達と活動することのよさに気付く児童が数多く見られるようになった。

(3) 研究の成果

○ 「自分や友達のよさに目を向けさせる指導・支援の工夫」として、日々の諸々の教育活動の中で、「自分を見つめる場」「自己表現の場」「友達のよさを認める場」を設定し、「開放したよさの窓」を広げようと努めた。そのことが、子どもに自分のよさや友達のよさを気付かせ、活動意欲をおこさせ、力を発揮させることにつながったと考える。特に「今日のヒーロー・ヒロイン」の実践は、事前の自己評価や保護者との連携を密にした一人一人に即した指導・支援につながった。

○ 「よさを取り上げ、伸ばす指導・支援と評価の工夫」として、向上や進歩を捉える主な視点を設定し、自己の成長を見つめる評価を工夫することにより、よさに気付いていなかった児童や否定的な思い込みをしがちな児童が、自分や友達、そして学級集団のよさに注目し、学び合いながら努力による向上や進歩を実感できるようになった。

また、向上や進歩を捉える個人カード「伸ばそう、子どものよいところ」の実践では、保護者と教師が子どものよさを共有し、共通指導・支援に生かすことができた。

○ 係の活動において自己評価や相互理解、教師による評価を関連づけることにより、子どもたちは、お互いのよさに学びながら自分の課題をさらに明確にし、活動意欲を高め、よさを発揮するようになった。また、評価を累積したことにより、子ども自身が「自分や係、友達、学級集団の変容（よさや高まり）」を捉えて活動に取り組むことが、活動をより主体的なものにし、自ら考えたり、判断したりして学級生活を向上させることにつながったと考える。

３ おわりに

児童生徒がこれからの社会の変化に対応して主体的に生きるために、人間として身に付けておくべき普遍的な価値観があるはずであり、それは生命尊重の精神に基づく生き方・在り方であると考える。生命尊重に関わる心の教育の決め手は、日常のきめ細かで地道な指導をおいてほかにはない。

「子どもは、みんな自分を見てほしい。声をかけてほしい。認めてほしい。」と願っている。保護者にとっては我が子がすべてであり、「先生がしっかり見てくれている」「伸ばしてくれた」といったことが、教師や学校への信頼につながる。子ども一人一人をつぶさに観察、理解すること、親身になった的確な指導、悩みや相談等への「迅速」で「誠意ある」対応が強く求められている。

このような中、今回、「よさを生かし、伸ばす」指導という視点から朝・帰りの会の指導や係の活動、保護者との連携など、日々の教育活動における指導・支援、評価の工夫を通した「自他の生命を尊重する思いやりのある子どもを育てる学級経営」の取組を取り上げ、再考察を加えた。

子どもは本来、様々なよさや可能性を内に秘め、よりよく生きたい、より向上したいという望ましい欲求をもった存在である。この「よさと可能性」に着目した児童理解は、子どものありのままの姿とその生き方が見えてくる。これが一人一人に対する指導・支援の具体的な方法につながると考える。公示された学習指導要領の前文でこれからの学校教育に求められることとして示された「一人一人の児童が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な

人々と協働」できるようにするためにも、「子どものよさを生かし、伸ばす」指導の一連の取組を工夫改善しながら教育課程や学年・学級経営案等に明確に位置付け、保護者との緊密な連携の下、一人一人の児童の発達の段階や特性等を踏まえつつ、指導を展開する必要があると考える。

さらに、今回の学習指導要領改定の基本的な考え方において、「道徳教育の充実や体験活動の重視による豊かな心の育成」が強調されているが、学習指導や生徒指導の基盤は学級経営にあり、道徳や特別活動の指導の充実が学級経営の充実につながると考える。

今後も、生命を尊重する心や他の人を思いやる心など豊かな心を育成する内容を学級経営の柱におき、学級や児童の実態をしっかりと踏まえながら、意図的・計画的、実践的に展開することが重要であると考える。

附記

本論文は、「自他の生命を尊重する思いやりのある子どもを育てる学級経営～日々の教育活動における指導・支援、評価の工夫～」の２つの視点の１つ「自分のよさを生かし、伸ばす」指導の部分（『平成５年度宮崎県教育公務員弘済会第21回研究論文集』）を加筆、修正し、考察を加えたものである。

※宮崎市立本郷小学校

引用・参考文献

○　文部科学省(2017)　『小学校学習指導要領』　1-2
○　岸田元美著(1980)　『人間的接触の学級経営心理学』　明治図書
○　梶田叡一編(1987)　『自己認識・自己概念の教育』　ミネルヴァ書房
○　釋迦堂幾則　問題行動への行動療法的アプローチ～よさに着目した望ましい行動の形成～
（『平成元年度宮崎県教育研究連合会紀要』）
○　釋迦堂幾則　自他の生命を尊重する思いやりのある子どもを育てる学級経営
～「聞くこと」「貢献すること」の指導～
（『昭和63年度宮崎県教育公務員弘済会第16回研究論文集』）
○　釋迦堂幾則　自他の生命を尊重する思いやりのある子どもを育てる学級経営
～「相互に信頼し敬愛し合う人間関係づくり」の指導、「関連指導を重視した生命尊重」の指導（『平成元年度宮崎県教育公務員弘済会第17回研究論文集』）
○　釋迦堂幾則　自他の生命を尊重する思いやりのある子どもを育てる学級経営
～「聞くこと」の指導を中心にした４年間の継続研究～
（日動火災教育助成「個人研究賞」受賞、『平成２年度高崎の教育』）
○　釋迦堂幾則　子どものよさを生かし、伸ばす特別活動～学級活動を中心とした肯定的自己認識育成の工夫～（平成４年度文部省小学校教育課程運営改善講座・香川大会特別活動部会発表資料）
○　釋迦堂幾則　自己理解を促し、望ましい自己認識・自己概念の基礎を育成する指導
～新学力観に立った特別活動の実践を通して～　（（『平成４年度宮崎県教育研究連合会紀要』）
○　釋迦堂幾則　子どものよさを生かし、伸ばす学級経営
（『平成４年度長期研修第三期課題研究報告集』　宮崎県教育研修センター）
○　釋迦堂幾則　よさを生かし、主体的に生きる力を育てる係の活動

（『特別活動研究』　明治図書　平成５年５月号）

○　釋迦堂幾則　子どものよさを生かし、伸ばす係の活動
（成田國英編『特別活動研究９月臨時増刊号』　明治図書　平成５年）

○　釋迦堂幾則　発達段階別・個に応じた指導（『特別活動研究』　明治図書　平成６年２月号）

○　釋迦堂幾則　個のよさを生かす学級リーダー育成（『特別活動研究』　明治図書　平成６年５月号）

○　釋迦堂幾則　子どもがもえる学級生活題材展開のポイント・自己決定をどう確かにするか
（『特別活動研究』」　明治図書　平成７年２月号）

○　釋迦堂幾則　授業研究　学級活動(1)話合い活動　学級を楽しくする係を決めよう
（『道徳と特別活動』　文溪堂　平成７年８月号）